

翌日も再び山に登って過ごした。

大草原の真ん中に突然ポカンと湧いて出てきたような塔公の町の片側は、半円をそれぞれ神様の名がついた山で囲まれていた。

標高の高い土地である塔公の山に樹木は生えず、遠目にみれば芝生につつまれたような緑の山肌は峰々の尾根の連なりがハッキリ見て取れた。あの稜線を伝って歩けば、一筆書きのように塔公一帯の全ての峰の山頂に立てるのだと、昨日の帰り道でそれに気付いた私は、もう翌日の登山計画を胸の中で温め始めていたのだ。

前日、結局すっかり辺りが暗くなってから塔公の町まで戻った私は、夕食がとりたくて再び小さな町の中を歩いたが、日が暮れるとサッサと店仕舞ってしまったらしい町並みはどの建物もぴったりと扉を閉ざし、通りはすでに真っ暗だった。唯一開いていたのは最初に入った汚く寂れた不味い麺屋一軒のみだ。あ～あ、また此处かあ～・・・吐息をついて店に入り、他のメニューなど存在しないようなその店で、また朝と同じ麺を食べた。

それでも空腹は最大の調味料だ。この日一日、朝の麺とお婆さんの家で硬いチベット・パンを半欠けかじっただけで山道を歩き続けていた私は、あまり味の感じられないスープに浸った麺もそれなりに味わうと、このまま宿に戻ってしまうのは物足りない気分だった。

残り少ない旅の夜が惜しいのと、まだ胸の中に燻っていた塔公の町への未練の気持ちで、もう少し町の中を歩いてみたかったが、街灯も無い暗い町の中を異国の女が一人で歩き回るのは賢明な行為とは思えない。大人しく部屋に帰ろうと宿に戻ると、門の前の道端にいつの間にか串焼屋の屋台が店を出して、小さな明かりを灯していた。これまで訪れた四川の街の何処でも見られた、おなじみの串焼き屋台だ。ああ！ やっぱりこの町にもあったんだ～！

店の規模はこれまでで一番小さく、焼かれている串の種類も乏しかったが、薄暗い蝋燭の灯に引き寄せられるように木のベンチに座り、数本の串焼きを食べた。無表情なチベット服の女性が黙って焼いてくれた肉はちょっぴりしょっぱ過ぎて、あまり美味しくは無かつ



チベット草原のど真ん中に建つ塔公寺(ラガン・ゴンパ)の裏は小高い丘になっていて一面に白いダルシンというのほり織のような祈禱旗がはためく。(2004年)

撮影：佐々木真理子

たが、それでもこうして塔公の夜の町にただずんでいられる事を喜びながら、昼間の出来事を反芻していると、夜の暗闇の中からのっそりと全身を完全なチベット服姿に身を包んだ男が馬を引いて現れ、私の隣に黙って座った。もしかしたら、この店の女主人の夫だろうか？

私がこの町を訪れる目的だった憧れの遊牧民、カムパ中のカムパが不意に目の前に現れたのだ。思わずドキドキしながら男の所作を見つめる私など、男の視界にはまるで存在していないようだった。大柄な体軀を日本の着物に丹前を羽織ったような民族衣装に身を包み、長い髪を頭の回りに巻き上げてゴツゴツしたアクセサリーを身につけた男は、まるで戦国時代の武者のようだ。こんなに完全なチベット服姿の男は理塘でも見かけなかった。薄暗い蝋燭の灯に照らされて目の前にうかぶ人影が現実のように思われず、まるで時間がタイムスリップした世界にいるような気分になった。やはり塔公は不思議な町だった。

この日の朝も、私にとっては唯一の食堂である麺屋で朝食をとり、再び町外れの山すそから尾根に登った私は、誰にも会う事のない細い尾根道を一日中歩きつづけた。山の要所要所にはタルチョやチオルテンといった神様の気配を感じさせるものが目を引き、この塔公にやって来てからは、常に神の存在が意識させら

れる。360度の地平線が見渡せる絶景を楽しみながら、淡々とアップダウンを繰り返す細い尾根道をたどり、無心に歩き続けるのは気持ちが良かった。

麓からは見えなかった地平線の向こうに連なる白い峰峰。まるで箱庭のように見える塔公の町。天を突いて聳える雅拉(ジャーラー)神山。草原を横切る一本道を辿れば、その先は八美(バーメイ)に向うはずだ。

昨日のお寺で会ったおじさんは、この土地の人間が亡くなれば八美に行くのだと言っていた。それはつまり、八美にも鳥葬場があるという意味だろう。

行ってみたいなあ・・・理塘で目にした鳥葬の印象はあまりに強烈だった。自然から与えられた生命は役割が終われば自然に還っていく・・・その弔いの形に強く惹きつけられるものを感じていた私は、他の土地での鳥葬の様子も見てみたかった。道の消えていく方向の景色に目を凝らし、どこかに立ち昇っている鳥葬場の煙が見えないかと、見える筈の無い八美の町を探した。もっともっと時間があればいいのに・・・私の残されたピサの日数は既にあと一週間のカウントダウンに入っていた。

この土地を出れば、後は康定を經由して真っ直ぐ成都まで戻り、一月前に捨ててしまったチケットの代わりとなる日本へ帰る航空券の手配などをしなければならぬ。塔公は事実上、この旅の最後の土地となるのだ。天空の大草原を思う存分に目に焼き付け、旅の間中ずっと自分を守り続けてもらった、それぞれの峰に鎮座するチベットの神々に挨拶して回ったような一日は、この旅の終わりに相応しいように思われ、私の気持ちは切なくも穏やかな満足感に包まれていた。

そろそろ夕刻の近づく頃、一帯の尾根道をぐるりと円を描いて歩いて戻り、最後に町の裏にある低い山の斜面の中腹から町を見下ろし歩いていると、眼下では大勢の少年僧達が赤い僧衣をたくし上げ、広場でサッカーに興じているのが見えた。彼らの楽しそうな歓声が、私のいる場所まで風にのって聞こえてくる。

ふと、稻城からの帰り道に立ち寄った寺で出会った少年僧が思い出された。此処にいる彼らもやはり、生涯仏の道に仕えるために家族と別れて来ているのだろうか？ その姿はまるで下界の学生達が放課後に仲間と遊んでいるのと、なんら変わりなく思えた。仏と共に生きるのが普通の事であるこの世界では、僧となる事はもしかしたら然程特別な事ではないのかも知れない。やっぱり彼らとて普通の少年なんだ・・・聞こえてくる楽しげな少年僧の声に、一日中すれ違う人も



塔公寺(ラガン・ゴンパ)青空に極彩色が映える。



塔公寺の裏山の向こうに真っ白な雅拉(ジャーラー)神山(主峰5820m)が聳える。

無く高原の空の風に吹かれて過ごしていた私は、何となく胸の中が温まるような気持ちとなり自然に笑みがこぼれてきた。

町ではやる事が見つからず山に登ってばかりいた塔公だが、私はまだこの町を去ろうという気持ちになれずにいた。明るい高原の爽やかな空気に吹かれ、神の存在が身近に感じられるこの土地が心地よく感じられて、何だか立去りがたい気持ちになっていた。

3日目の朝も相変わらずいつもの麺屋で朝食を取り、今日をどう過ごすか考えながら宿に戻ると、入り口で出会った宿の主人に「きょうは何処に行くんだい?」と声をかけられた。これといった予定も無い私が「まだ判らない」と答えると、主人は嬉しそうに「だったらお寺に行くといい。今日はこれが見られるよ」と両腕を前に突き出して手のひらを滑らせながら打ち鳴らす動作をして見せた。

それが何の事なのか、主人の説明では解らなかったが、とにかく今日は塔公寺で何かが行われるらしい。町ではやる事が見つからず、付近の山も歩きつくしてしまった私に、今日の目的地が出来た事は大歓迎だ。主人の笑顔から何か楽しい事が行われるように思わ

れ、それは見逃しちゃならないといそいそと出かける支度を整えた私は、町の外れにあるお寺に向かい入場料の10元を支払って門を潜った。

この塔公寺(ラガン・ゴンパ)は一月前にも当初の旅メンバーと訪れていた。真っ青な空の下、塔公のシンボルであるダンシルの林立する神山を背景に従えたお寺は、7世紀頃から伝わるチベット仏教サキャ派の、この中国チベットエリア内でも特に格式の高いお寺なのだという。

宿の主人の口ぶりから、お祭りでも行われているのかと期待していたが、境内は特に何かが用意されている様子もなく、人が集まっている訳でもない。何だか拍子抜けしながらも、前回は大勢でゾロゾロと流して見た境内を、時間をかけてゆっくりと廻った。本堂は真ん中が吹き抜けの二階建てになっていて二階の回廊から階下を眺め下ろす事もできた。なるほどこれまで見てきた中でも一番立派な造りのお寺だ。

私が二階の手すりにもたれボンヤリしていると、廊下を歩いてきた僧侶が笑顔で声をかけてきた。「君は日本人かい? いい日に来たね。今日はこれがあるから面白いよ」

そう言いながら、僧侶も宿の主人と同じように、両手を前に出し手のひらを滑らせるように打ち鳴らして見せた。

いったいその動作は何の意味だろう? 僧侶に尋ねても拙い中国語しか話せない私には、返ってくる言葉の意味が解らない。それでも特に変わった様子の見られないお寺にちょっぴり落ちていたテンションが、やはり何か面白い事が行われるのだと確かめられた事で再び跳ね上がり、それはいつ始まるのか尋ねるとあと2時間後位だという。

なんだ~、ちょっと早く来過ぎたんだ。一旦寺を出て時間を潰す事も考えたが、旅のラストスパート期に入り懐事情がかなり切迫している私には、お寺の入場料さえ惜しかった。寺を出たところで、特にやりたい事がある訳でもなく、のんびりその時間が来るまでお寺で待つ事にした私は、改めてゆっくりとお寺の壁に描かれた六道輪廻の地獄の様子を興味深くシゲシゲと眺めたり、寺の天井に描かれた模様に関心したりして過ごした。

表に出れば本堂の横に設えられた観音殿では、チベットエリアで一番大きい観音像とされる、美しい千手観音が祀られている。これまでもこの東カム地方のチベット・ゴンパで様々な仏像を拝んできたが、この塔公寺の千手観音はとりわけ大きく、美しく装飾さ

れて、思わずハッと目を引く存在感が感じられる。それ故チベット族の人々からも特に深い信仰を集めているのか、観音殿の入り口では何人もの巡礼者のような人達が熱心に五体投地を繰り返している姿も見られ、そんな彼らの様子を眺めていると、そこで巡礼者の様子をスケッチブックに描いていた一人の青年から話しかけられた。

ヨレヨレのシャツとズボン姿の、チベット族とは少し違った風体の彼に話を聞けば、その青年は上海からやって来た中国人で、チベット仏教に憧憬の念を持ち、放浪の旅をしながらチベットの寺を巡礼して回っているのだという。中国の漢民族にもそんな人がいるんだな・・・と意外に思われた。やはり何処の国の国民でも色々な人がいるものだ。

時間をかけてゆっくり観音堂を御参りしてもまだ時間が余っている。所在無く寺の境内を歩き回っていると、先ほど本殿で声をかけられた愛想の良い僧侶に再び出会った。

「やあ、君か。何をしてるんだい?」

「これが始まるのを待っているの。」

私はその意味が解らないままに、宿の主人や先ほどの僧侶の仕草を真似て、両手のひらを滑らせながら打って見せた。すると僧侶は言った。

「始まるまでにはまだだいぶ時間があるよ。それまで私の部屋に遊びに来ないかい?」

ええ??? お坊さんの部屋にい~!?

僧侶のあまりに気さくで意外すぎる申し出に、驚いた私は一瞬躊躇しながら忙しく思考を廻らせた。いくら相手がお坊さんとはいえ、一人で気軽に見知らぬ男性の部屋について行くななんて如何なものなの...???

だが、何かが始まるまでの長い待ち時間には、やや時間を持って余し退屈していたところだし、それより何より何か面白そうな事があれば、首を突っ込まずにいられない私だ。なんと言っても相手は僧侶で、ここはお寺の境内だし危険な事などある訳がない。

「お部屋は何処にあるんですか?」

「あそこだよ」

僧侶が指差したのは、寺の境内の建物の一角だ。

「ええ、お邪魔します」

そうして私は先に立って歩く僧侶の後について歩き始めた。

(次号に続く)

